

第5章 結言（臼井健二・梅谷智弘）

本研究は、学際的かつフロンティアである、情報・生物・化学・物理の融合分野研究であり、理系の全ての分野の研究者が加わって行うことが理想であった。本学発の研究開発を進めていくうえで、さらにさまざまな先生方に、認知、理解していただき、参画していただければと考え、アウトリーチ活動もテーマとし、精力的にナノバイオ交流会や勉強会を開催した。

今後の展望としては、電波の影響の解明をさらに様々な生命現象を題材に進めていき、最終的には文系学部との連携を検討していきたい。例えば、悪影響を及ぼす部分については、新たな環境問題の一つとして、本学を挙げて、警鐘、提言を行ってきたい。逆に、良好な影響を及ぼす部分については、本学発の目玉研究となる、医療・産業への応用展開を最終的な目標とする。このような際に、法整備などでは法学部、起業・新産業化などでは経済学部、経営学部、CUBE などとも連携できると考えている。以上のように本学内の様々な学部との連携の足がかりとして本テーマは総合研究として遂行できたと考えられる。またこの活動に積極的に学生の関与も促させていただいた。通常の授業や、卒業研究活動では得られない、アウトリーチ活動経験や産学連携活動経験をオンザジョブトレーニング形式で提供できたと考えている。

本研究が完了すれば、生体分子や生体サンプルなどの電磁波影響のメカニズム解析が可能となり、これまで研究されてこなかった学際的かつフロンティアである、情報・生物・化学・物理の融合分野の研究促進化に大きく貢献することになり、学術的な意義は高い。また本分野のイニシアチブを本学がとることになり、本学の学術的なプレゼンスが上がるのが期待できる。またこの研究を通じたアウトリーチ活動の検討を行うことで、本研究自体の認知度が上がることはもちろんのこと、今後の様々な研究テーマにおいてどのようにアウトリーチ活動を行えば効果的かつ効率的に行えるかといったノウハウを本研究チームが提供することで、本学の様々な研究テーマ・活動の参考に今後なっていければと考えている。

本研究の遂行にあたって、実質的な実験遂行はすべて本学学生によるもので

あり、ここに感謝の意を表す。以上のような研究活動はなかなか外部資金が得にくい中、研究資金を提供していただき、またノウハウを伝える場としてこのような叢書を作成する機会を与えてくださった、甲南大学総合研究所に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。